
硝子の人魚

祇諳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子の人魚

【Nコード】

N7666H

【作者名】

祇諳

【あらすじ】

君はどこに行ったんだろう。あいつは誰だったんだろう。

目を覆いたくなる程に残酷な現実が目の前に突きつけられていたとしても、凍りついた様に動かない体は役に立たないまま、そのむせ返るような暑さの中で立ち尽くしていた。

「・・・嘘だ。」

其れは事実の、現実の光景だ。

「夢だろ？」

それはじじつの、げんじつのこうけいだ。

「嘘だ！」

叫びと、悲鳴。その理由。

<水面に浮かぶ、青ざめた少女>

それはまるで、ガラスの鱗を纏った人魚。

狭い寢室の窓から聞こえる笑い声。それは打ち寄せる波の音に似ている。

頭痛と吐き気に襲われて目を閉じると、目を覚ます幻。記憶の端にいる少女の、細くしなやかな肢体と真っ白なワンピース。まっさらな笑顔と無邪気な仕草を何気なく見ていたあの日。そして、見失ったあの日。僕は一心不乱に彼女を探していた。

「美咲、どこに隠れた？ 出てこいよ。」

汗が頬を伝うのを拭う間もなく町中を探し回っていた僕は、真夏の照り返しの強いコンクリートの上を走っていた。どんなに叫んでも返事が無い。愛用の青い野球帽をかぶり直すと、町から少し離れた海辺まで足を伸ばす。暑い日差しに焼けた砂で空間が歪んで見えた。堤防から下り、太陽の熱を存分に吸収した砂をサンダルで蹴り進む。波打ち際に集まった角の取れた硝子の破片が光る。積み上がったテ

トラポットの陰を覗き込みながら、海水で湿気たコンクリートの匂いを嗅いだ。塩辛さを鼻の奥に感じ、顔を上げる。少女はどこにも見当たらない。

夕風と紅く染まる空の下で、身体中砂だらけになりながら少女を探していた僕は、一瞬例えようも無く張り詰めた空気を感じた。砂を踏みしめる足音。ふと前を見ると、そこには僕と同じ年恰好の少年がいた。ゆっくりとこちらに向かってくる、足音。声をかけることもせず、僕は黙って彼を見る。少年は目深にかぶった野球帽の下から僕を見ていた。

一歩一歩近づいてくる度に僕を襲う重圧。息が詰まる。すれ違う瞬間、彼は口の端で小さく笑った。子供、じゃない。これは、死神。

逃げなけれ

ばいけない。

そう咄嗟に感じた瞬間、足は無我夢中で前へと進みだす。早く、速く逃げなければ。息が切れて、足が砂にとられ、声も出ない。言い知れぬ恐怖と不安。頭が回らない。ある程度走ったところで振り返ると、もう彼は居なかった。

息をするのを思い出し、深呼吸をしてテトラポットに寄りかかる。不意に視線を移した岩陰から覗く青白い指先。僕は全身から血の気が引いていく音を聞いた。

「・・・美咲？」

見覚えのある指。いつも僕を掴んでいた手。そつとその腕を掴むと冷たい。岩陰の向こうを覗くと、青白い肢体と長い髪が水面に揺れている。

「う・・・！」

僕はあの時の、仏蘭西人形の様な少女の瞳を忘れない。

目を見開いて、波間を漂う少女。

それはまるで、月夜の光の残り香をその鱗に残しながら海辺に打ち上げられた、人魚

不快な夢を見た。ひどく汗をかきながら外を見る。もう十年以上経つのに生々しい記憶は鮮明さを増し、少女の美しさを際立たせていく。青い海の一点に浮かび、全ての流れを止めた少女の姿は、僕の心に焼き付いて離れない。

「美咲・・・」

ベッドの上から下り、ベランダの外を眺める。いつもと変わらない空の青さと街の眺めだ。しかし、夢の残像が呼び込んだこの不安は何だろう。

部屋の中をざらついた風が通り抜ける、充満した不快感。眩暈に似た感覚と吐き気に、再びベッドに戻った。

突然、玄関の扉が開く。

「居る？」

「確認無く人の部屋に入ってくるな。」

「居るなら良いじゃん。」

ブーツがフローリングの床を歩く音が聞こえる。皮のパンツをはいた細い足が目の前で止まった。

「まだ寝てんの？」

「具合が悪いんだ。そんなことよりお前、土足で家に入ってくるな。」

女は自分の足元を眺め、首をかしげる。

「アメリカじゃあ、日常よ。」

「ここは日本の、僕の部屋だ。仕事帰りのお前にとやかく言いたくないが、涼子。」

顔を上げるとその先にいるロングヘアの女。仕事の同僚だ。・・・いいや、仕事の同僚だった。女。

「調子、どうなの？」

僕は先月、出版社の仕事を辞めた。精神疾患という事になっているのだが、自分の中での自覚が無い。最初の症状は漁港の取材に行っ

た先の海辺で意識を失つたらしいことだった。僕自身の中で、そのときはつきりした記憶が無い。精神的な疲労からくる何からしいが、医者言うことはイマイチ解らなかつた。

その時、僕は取材の最中に迷い込んできた少女の姿を捉え、それを目で追っていた。

「・・・で、今回の漁獲量と重ねて、この結果に。」

「今後の一次産業の人手不足を補う策として、都市の若者に着目している漁組も在りますが、その辺は、どのように・・・」
会話の途中で、少女がこちらをじっと見ているのに気がついた。

「すみません、あの子は？ 先ほどからこの辺をうろついているみたいなのですが。」

「ああ、近所の子供ですよ。」

塩に焼けた顔を歪ませて笑う漁師の向こうで、髪の毛の長い少女が堤防の上で遊んでいた。気を取り直して取材を行い、写真を撮っていた僕の耳に劈くような悲鳴が飛び込んできた。港の中がざわめく。

「何かあつたんですか!？」

人集りの先に駆け込んでいった僕は近くの漁師に訪ねる。

「なあと、子供が溺れたんだ。気にすることは無い。少し水を飲んだだけだ。」

人々の視線の先に寝かされていた少女の青い唇、濡れた長い髪。その光景、何処かで見た気がする。

「おい、兄ちゃん。顔が真っ青だぞ。具合でも悪いのか。」

周りの人間が何か言ってる。聞き取れない。頭が痛い。苦しい。息が詰まる。何だ？ 景色がまわってる。足元がはつきりしないや。からだに力が入らない。

あれ・・・？

気付くと僕は病院のベッドに寝かされていた。それ以来僕は、こうして一日中家にいる事しか出来なくなってしまった。

そんな僕を気遣ってか、涼子は仕事の合間を縫って僕の所に来る。

「そうだ、瑞貴。貴方にお土産。」

「何だよ」

「いいもの」

フィルムの包みを取る耳障りな音がした。僕の目の前に置かれたそれは昼下がりの生温い空気に鈍色の青い影を落とす。

「綺麗でしょ。」

涼子はうれしそうに笑った。それは青い硝子球。中に満たされた水は淡い碧色。まるで海の断片を押し込んだ様だ。

「なんだ、これ。」

「癒し系の小物らしいんだけど、これを見てると心の整理が付くとか。」

僕の目の前にそれを置き得意げに僕を見る涼子は、まるでカメラの前のモデルのようにしなやかな足を組んでソファに座っている。こうして僕を訪ねてきてくれる、気まぐれな猫のような涼子がいるから、僕はまだ人間としての感覚を失わずに済むのかもしれない。

「ありがとう。」

笑い方を忘れつつも精一杯に微笑んで、自分の不器用さに苦笑した。

「何笑ってんの。」

あきれながら笑う涼子を見て、また笑った。

僕は涼子が持ってきたそれを、涼子が帰った後も一日中凝視していた。その青は、自然の気配を凝縮したように丸い塊になって僕の前存在した。触れて見ると思いのほか軽い。中の水の流れに吸い込まれて、確かに落ち着く気はする。

「心の整理、ね。」

立ち上がり、テーブルの上にそれを置く。

お兄ちゃん。

血の気が一気に引いていく。唐突に聞こえた少女の声に振り返るが、そこにあるのは青い球体。ゆらゆらと通り抜けた光を歪ませている。息を呑んでそれを再び手に取った。

夕風の静寂故の騒がしさ。頭の中を暴れる砂の陽炎。テトラポットの、あの鼻腔を刺激した塩辛い蒸気。波打ち際の流れ着いた硝子。あの日の鮮明なビジョンがこのちっぽけな青い物に映し出されて消えた。

「何なんだよ、これ。」

ベッドの上に放り投げて、ベランダの窓を開ける。きっと酸素が足りないんだ。空気の入替えをして、深呼吸をするんだ。そうすれば、きつと

「・・・え？」

窓を開けた僕の眼下に広がっているのは、海。

ついに、僕は頭がおかしくなったのかもしれない。僕は都会のと真ん中の、マンションの10階の僕の部屋のベランダに居たんだ。違う。これは幻覚だ。

「おにいちゃん。」

水面から伸びる手。それは人魚の指先。

「ミ、サキ・・・」

硝子の人魚。硝子の鱗を煌めかせ、波に任せたその長い髪を誇らしげに太陽に翳す。

「おにいちゃん、遊ぼうよ。一緒に、遊ぼうよ。」

いつの間にか、部屋中水浸しだ。美咲が僕の目の前で、その幼いままの姿で微笑んでいる。幻覚だ。リアルな幻覚だ。

「く、くるな・・・」

腰を抜かして倒れた僕の首筋に触れてくる、冷たい手。黒目がちなその目を僕に向けてくる。射抜かれるような既視感。そう、この感覚は、あの日の少年の目だ。まるで地獄の底辺をこそげてきたような、闇に染まった目だ。

・・・シヨウネン？

「おにいちゃん。」

笑いながら、手を繋ぎ歩く海岸。焼けるようなアスファルトと風の中に混ざる潮の香り。今日は妹と一緒に遊ぼうと思う。小さな手を握りながら歩く海岸で、貝を拾って遊んでいる妹。かわいい、僕の妹。

周りの大人は僕を出来損ないだって言うんだ。僕が捨て子だから。みんな僕を貶したり、暴力を振るったりするんだ。でも僕は平気だよ。だって、いつだって僕の傍には妹がいてくれる。

空間が一つ一つの自由電子の様に動き回る。人間はまるで無限の癌細胞。際限なく増え、交わり、汚染していく。気味が悪いこの世界の中で、君だけが綺麗。自分には青く見えている空も、他の人には違って見えているかもしれない。それでも、君と僕は同じ空を見ていると、同じ世界を見ていると信じていた。信じて、いたのに。

あの時、君は何て言った？あの幼い声で、僕に。

「お兄ちゃんは、
何て？」

「お兄ちゃんは役立たず

のイラナイ子なんだ。」
え？

イラナイ。

君まで僕を苦しめるのかい？君まで僕を否定するのかい？みんな、そんな風に容にこだわるんだね。無邪気に笑いながら、残酷な言葉を吐いた君は、なんて、恵まれてる。君はいつだって、父さんにも母さんにも姉さんにも愛されてるから。僕はいつだって一人なんだ。いつだって一人ぼっちなんだ。

悲鳴。僕が触れた悲鳴。いいや、音なんて聞こえなかった。あれは君がとても苦しそうな顔をしたから聞こえた幻聴だ。僕は何もして

いない。だって君があまりに酷く泣くから、だから君を黙らせたくて

「ナカナイデ、ミサキ」

だから僕は君を捕まえて

「ナカナイデ・・・」

君の首に手をかけて

「・・・泣くな」

そして、

「美咲」

・・・殺してやる。

青い野球帽が波間に落ち、少女は人魚になる。波間の泡のゆりかごの中で。

世界は今日、僕を否定したんだ。だから、僕は要らないんだ。今までの僕にサヨナラ。現実は要らない。全部硝子箱に詰め込んで、海の中に葬る。君を殺した少年は、もうここには居ないよ。僕とすれ違っただけ消えた。

僕は生まれ変わるんだ。

今、思い出した。

「・・・そうだ、」

あの時、砂浜ですれ違った少年は

「美咲を殺したのは・・・」

僕自身だ。

幻影の人魚。硝子の様に美しいその衣は海の青を七色に変える。

「おにいちゃん、遊ぼう。」

ゆっくりと海へ誘われる身体は、まるで水を切るかのように早い。

段々と仄暗い海底へ引き込まれていく。ああ、幼い君はこんなところ

るにずっと一人で居たんだね。ごめんね。僕の愚かさは君をこんな所にまで至らしめてしまった。

「ああ、遊ぼうか。」

いつ果てると知れない貝殻拾い。君の満足するまで。いつ終わるとも知れない子守唄。君が眠るまで。

「さあ、眠ろうか。」

・・・

グシヤツ

無機質なアナウンサーの声。電波の悪いラジオ。青いルームライトに照らされた部屋。

「・・・次のニュースです。今日午後2時頃、都内のマンション10階のベランダから、男性が投身自殺を・・・部屋には大量の精神安定剤と催眠作用の小物が・・・こちらの商品は電源を入れたままで長時間凝視すると幻覚作用が・・・」

「・・・何が、ヒーリンググッズよ。注意書きが存在するだけで殺人兵器じゃない。」

ラジオの電源を切り、ベッドルームへと歩くブーツの足音。煙草の匂いが染み付いた部屋で鏡台の前に座った女。

「やっぱり、病んでたのよね。瑞貴は、あの日から。」

写真立ての少女に語りかけながら、化粧をする。

「とんでもないお兄ちゃんね、美咲。あんたと一緒に自分まで殺して、今までのうのう生きてたのよ。」

ゆっくりとチークを塗りながら鏡を凝視する女の耳に、電話のベルが響いた。受話器の先、老婦人の声は震えている。

「はい、涼子です。ああ、お母さん。・・・瑞貴のこと？ ニューズ見たわ。え？ 警察に居るの？ 解った。今行くわよ。」

受話器を置いて、口紅を塗る。

「・・・まったく。」

車のキーとバックを持ち、女は玄関を出た。女は、まるであの硝子の人魚の様に美しい黒髪を風に靡かせながら歩く。

「姉の顔も名前も解らなくなるなんて、相当よ。瑞貴」

失笑は鋭い笑みに変わり、その目はあの少女を飲み込んだ海の、淀んだ水底の青に似ていた。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666h/>

硝子の人魚

2010年10月28日00時53分発行